

野村雅昭著『落語の言語学』

中村 明

思えば、ふしぎな本が出たものだ。著者自身が「あとがき」を「われながら妙な本だとおもいます」という一文ではじめているとおりである。「妙な本」と自分で認定する根拠は、言語学者にも落語の愛好家にも歓迎されるはずがないというところにある。言語学者はこれを言語学とはみとめず、落語愛好家にとってこんな理屈はよいなお世話だというのだろう。

ぼくは専門の言語学者ではないし、落語の専門家でもなく、むしろ落語家でもない。はるかな昔わずかばかり国語学をかじり、たまに道楽で落語を聞いているにすぎない。そんな素人から見ても、この本では部分的ながらたしかに言語学ばりの分析をほどこしている。落語鑑賞に際して理解を深めるための知識もふんだんに盛りこんでおり、本物の落語家の真打でさえ芸をみがくうえで参考になる話も少なくないように思う。だから、その点ではちつとも妙ではない。「妙な本」云々は、ひよっとすると、「落語の言語学」などと大きく出た書名がなんだか気になって、ちよつとてれてみただけかもしれない。

ぼくが「ふしぎな本」だというのは、娯楽と見られている落語

について、少々むきになっているとさえ思えるほどまともに取りくみ、本物の落語家がきかれるぐらい本格的に論じているからだ。とつさに頭に浮かぶだけでも志ん生、文楽、柳橋、金馬、三木助、可楽、柳好、正蔵、今輔、円生、小さんと名人上手のそろっていた昭和三十年代を考えてみても、今は落語そのものの隆盛な時代とはいえないと思ひこんでいた。それだけに、微に入り細に渡って専門的な知識を注ぎこんだこのような本が大きな反響をよんだという事実には、うれしいとまどいをおぼえるのである。

あちこちの新聞雑誌に紹介され、いろいろな書評が飛びかい、そしてたぶん相当売れているはずだ。書評の中には、素人の言語論と勘違いでもしたのか、本式の言語分析に感心したような口ぶりも見られたと聞く。だが、これは、落語学者の趣味的な言語論でも、言語学者の趣味的な落語論でもない。著者は特に現代語の文字表記、漢語の語構成、語彙論などの分野に大きな研究業績を残す国語学界の権威である。と同時に、小学校四年生のころから寄席通いを続け、今でも会場の隅々まで美しく響く、あの素人ばなれした声からも察しがつくように、高校時代には自ら落語を演じ、大学二年の折に、人も知るお堅い東京教育大学に落語研究会を創設したというほどの、根っからの落語人間なのだ。

職場に勤めてからは、むやみに芸術しみをしようになつたようだ。国立国語研究所で現在部長の位にあるN氏の結婚披露宴の折に、「高砂や」だったか「松竹梅」だったか、めでたい斬を、高座にかけたのを一度うかがったきりである。が、ぼくはその一席に驚嘆した。これは古典落語の正統派の芸ながら、当時の直属

の上司であつた現大妻女子大学教授のS氏が噺のなかにアドリブで登場するなど、自由闊達な芸風で、この男は進むべき道をまちがえたな、今からでも……と本気で思つたほどだ。

「あとがき」の終りに「一九六〇年ころに輩出した東京落語の名人たちがいなければ、この本はうまれなかつたはずです」と、名演を音として残してくれた噺家たちに謝辞を述べたあと、そういう出会いがなかつたら、「わたしの人生も、ものたりないものであつたにちがいありません」と著者は書きそえなければならなかつた。じいんと来る。この事実が、この本の性格を決定的にしたように思う。つまり本書は、よくも悪くも、専門の国語学者が自分の専門にしている落語について正面から論じたプロの語学的落語研究なのである。

*

だてに「プロの」と言うわけではない。たとえばレコードを聴くにしても、モーツァルトの交響曲四〇番の盤を一枚持つていれば、別の指揮者のもう一枚を買うという知恵がばくにはなかなか浮かんでこない。落語でも桂文楽の「明烏」を所有しているときに三遊亭円生の同じ噺を買い足すことにそれほど熱心ではない。ところが、この著者の場合は、「時そば」なら「時そば」という同じ演題について、柳橋、三木助、小さんらのテープをそろえるどころか、同じ志ん生の演じたその時の「風呂敷」なり「火焔太鼓」なりの録音を可能なかぎり集めたいのだ。一席一席における演じ方の微妙な差を鑑賞の楽しみとし、必然的にそれが研究の対象となる。だから、金がかかる。テープだけではない。参考

文献リストを見ても、古本で万とつきそうな本が少なくない。少々売れたところで、この本の印税ではとうてい賄えそうもないほどの元手がかかつているのである。

むろん、金だけではすまない。気楽に書いた趣味の本と見られやすい本書が、実は、口演速記を元にした拙家ごとの全集、私家版から大学の紀要論文、それに劇場の月報類に至るまで、硬軟両面に渡る広範で精力的な文献蒐集に支えられている点も見のがしてはならないだろう。

著者にはすでに落語に関する数多くの論考がある。本書は四つの章からなるが、第一章「落語の言語空間」だけがこの本のための書きおろしで、第二章以下はその既発表論考の一部を骨子としている。すなわち、第二章「マエオキはなぜあるのか」は明治書院の月刊雑誌『日本語学』に一九八九年二月号から連載をはじめた同題の「落語の言語学」のうち「落語のマエオキ」の部分で、第三章「オチの構造」は同じ連載の同題の部分で、第四章「演題の成立」は同じく明治書院刊『辻村敏樹教授古稀記念論集 日本語史の諸問題』所収の論文「落語の演題の造語法」をそれぞれ中心にして、いずれも大幅な加筆をおこなっている。

以下、章を追って簡単な内容紹介を試み、合わせて若干の感想を書きそえることにしたい。

第一章の第一節「話芸としての落語」で、まず、「話す」・「語る」・「読む」という言語行動の種類から話芸を分類し、浄瑠璃や浪花節が「語る」芸であり、講談が「読む」芸であるのに対し、落語は、漫才や漫談と並んで、「話す」芸であるという基本的な

性質をもつことを確認する。

続く第二節「落語のことは・落語家のことは」では落語家の口から出る言語表現を、(A)聴衆のいないところでかたられる落語家自身のことば(B)直接に聴衆にかたりかける落語家のことば(C)落語家により落語の登場人物のものとしてかたられることばに三分し、往年の大看板とされた拙家はほとんどが東京の下町育ちであったため、Cの中に無意識のうちにAが混入していることを、音声の面、語句の面、語法の面に分けて実例で示す。また、歌舞伎の女形と違って、落語では女を演ずる場合でも声をつくってはならないという不文律があるため、男と女、子供と若者と年寄、大名と下級武士、商家の主と番頭と手代、それに職人と百姓と医者と僧侶と遊女といった登場人物を、ことばを唯一の手段として演じ分けなければならぬ。落語のむずかしさを説く、そういうくだりを読みながら、ばくには著者の悦びが伝わってくるのである。

第三節「談話としての落語」では、送り手をP、受け手をQ、会話の中の登場人物である送り手をx、受け手をyとした場合、「地」は演者Pの聴衆Qに対する発話で $P \rightarrow Q$ と表示され、同じく「独白」は登場人物xの発話だから $P(x) \rightarrow Q$ となり、「対話」は登場人物のxのyに対する発話だから $P(x \rightarrow y) \rightarrow Q$ と表示されると記号化して、断や演じ方の違いを談話構造の枠組みと関連させつつ伝達論ふうに説明する。

第四節「落語の構造」では、出囃子が鳴って拙家が登場し、一席をつとめあげて退場するまでの構造モデルを図式的に明らかに

する。すなわち、落語の「本題」に入る前にたいてい「まくら」をふり、本題の部分の末尾に原則として「落ち」がつくのがその特徴で、その外側に「前置き」や「結び」をとまなう場合もある。また、本題部分の構成には、一人対一人の対話を基本型とし、その派生型としての「おうむ返し」や「くり返し」、一人が中心となつて複数の人間を順に相手とする一対一の変型などが見られるという。

第二章「マエオキはなぜあるのか」では、そのうちの「前置き」の性格や機能を考察し、膨大な資料を詳細に調査分析して、時候の挨拶、来場への謝辞、辞去の請願など八項目の要素をもとにその構成をパターン化し、個人別の特徴や時代的な推移を明らかにしている。

第三章「オチの構造」は本書の中心をなす力編である。従来の「落ち」の諸種の分類説や比較的新しい枝雀の四分類案に批評的解説を加えたのち、著者自身の創案になる談話行動を軸とした斬新な分類案を披露する。これが落語の言語学となる所以だろう。しぐさなど非言語行動による落ちを別にすれば、言語行動のタイプの違いから「地」「独白」「対話」によるそれぞれの落ちに分かれる。これを土台にし、落ちの発話者の表現態度、特に会話の論理性を基準に「まとも」「とりちがえ」「こじつけ」「ナンセンス」に四分類する。型の検討のたびに具体的な例が紹介されるので、落ちを中心とした落語アンソロジーの趣もあり、圧巻である。

第四章「演題の成立」は、演題の構成や命名視点などから落語の演題というものの特徴を国語学的に探った終章である。

以上のように、国語と落語の両語学に秀でた学者にしてはじめて可能な研究書として画期的な業績である。その点では空前の著作であり、今後他の追隨を許さないだろう。しかし、一方でちょっともったいない気もしないではない。国語学の専門家としての意識が足をひっぱって、分析がややもすれば形態面にとどまり、面白さという表現効果に対する突っ込みが足りない感じを受けるのだ。名作に、名演にひたるあの感動を学問的に証明することはむずかしい。だが、いつの日かそこに届くかもしれない、そういう期待を抱かせる研究であることを、名文の語学的分析から文学の文体を見つめるときにぼくは夢みてきた。

その意味で、この著者にもぼくのように恥をかいでもらいたか

った気もする。演題と前置きと落ち、落語にとってそれも命かもしれないが、まくらから落ちへと流れていく一席の展開をぼくらは楽しめ、名席に酔う。序説としての本書に収載しなかった比喩の考察や連載中のレトリック関係の分析をまとめて一本にする、そのあたでもいい。この嘶のどういう点が名作なのか、どういう表現がどんな効果を奏しているのか、だれのどういう演じ方がどんなふうにするのかを言語事実に即して具体的に解説してくれないだろうか。いわば「落語の言語」学の誕生だ。そして、時には学者であることを忘れて、いつかのあの自身の好演のように、闊達な落語談をもぜひ聴かせてほしいのである。

(一九九四・五 平凡社 四六版 三三六頁 二四〇〇円)

新刊紹介

野村雅昭著

『日本語の風』

日本語の将来につながる問題に関する既発表の論考を集めた随筆・対談集。書き下ろしの総論「Ⅰ日本語の風」に続いて、本書の中核といえる「Ⅱことばの基準」「Ⅲ情報化社会の言語生活」では漢字制限の問

題を中心に表記を考える。言語情報処理技術の進歩、とくにワープロによる文書作成の普及に対応して、日本語の表記がいかに変わって行くべきかという問題に関して多くの論考を収録する。より多くの人が享受できるような正書法の確立、さらには日本語の国際的普及を目指して外国人にも扱えるような表記への転換を目指すべきだという筆者の視点が一貫して窺える。「Ⅳ表現

と教育」に収められた対談には日本語の専門研究者以外の人々との意見交換もあり、また「Ⅴことばの背景」では語構成に関する研究の多い筆者が「チョー」「…ぼい」等の新しい語(構成素)について述べた随筆などを含み、気軽に楽しく読める。

(平6・8 大修刊書店 B5版 三〇六頁
一八五四円) (吉田 健二)